【2019年5月30日発行】
THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES
日本国際文化学会ニューズレター42号
http://jsics.org/

日本国際文化学会事務局
多摩大学
グローバルスタディーズ学部事務室内
〒252-0805
神奈川県藤沢市円行802番地
Tel: 0466-82-4141
Fax: 0466-82-5070
Email: jsics@gr.tama.ac.jp

「つなぐ」役割ーご挨拶にかえてー

日本国際文化学会会長　馬場 孝

この春、岩野雅子前会長を引き継ぎました馬場孝です。思わぬ経緯、そして様々な事情が重なり仰せつかることとなりました。そのときの気持ちと、その後、少し考えたことをお伝えすることで、ご挨拶に代えたいと思います。

戸惑い、躊躇いながらも最後にお引き受けした一番の理由は、ただただ、この学会は「楽しい」からでした。これがなければ、他のどのような事情や理由が重なろうと決してお引き受けしませんでした。

「国際文化学の振興と普及」を目的に謳う学会ですが、国際文化学の厳密な定義について会員間に一致した合意があるかは疑問です。それぞれが「国際文化学」について多様なイメージを持っていて、そのイメージのふくらみこそこの学会のよいところでしょう。

私個人の思い入れの焦点は、「インターカルチュラル」の「インター」という言葉にあります。語義以上に、この言葉に一種の「飛び出し感」「突き抜け感」を読み込んでおります。既成の枠を飛び出し、新たなテーマや方法に挑戦することを可能にする「間」「際」でしょうか。具体的には、直近では、昨年度平野健一郎賞を受賞された目黒志帆美会員の受賞スピーチが思い浮かびます。「この論文は本当に自分が書きたかったテーマだった。しかし、私たち若手はどうしても査読を通る論文を書かなければならない。自分の専門は歴史学である。したがってフィクションを史料として用いる手法に二の足を踏む。この学会での報告や学会誌への投稿は、その挑戦を可能にしてくれた」。そのような趣旨であったと記憶しております。

さかのぼれば、元会長・白石さや顧問が、「マンガ・アニメ」のグローバル化の研究に着手し、最初の成果を米国で発表しようとした際の主催者の反応がAre you kidding?であったという逸話。あるいは、初代会長・平野健一郎顧問の、パワーポリティックス全盛の時代に、文化的側面からの国際関係の分析を企図し、独自の手法を構築してこられた道程。未踏の領域に挑まれたこれら先達の足跡も想起されます。

このように「本当にやりたいこと」に挑戦する得難い「場」としての、本学会の存在意義を実感する機会に恵まれたことも、お引き受けした理由に加わります。設立以来、本学会を育て、支えてこられた多くの方々に、この場を借りて、心より敬意を表し、感謝いたします。

そのお一人である元会長・若林一平顧問は、学会誌最新号で、「心はいつも旅をする」限りない自由の世界、これこそが国際文化学の魂ではないかと述べておられます。私が感じる「楽しさ」の由来でしょうか。数十年前、制度化、標準化という観点から諸学を俯瞰し、経済学の本質を論じたのは佐和隆光氏でした。およそ制度化、標準化、さらにいえばマニュアル化になじまないのが国際文化学でしょう。

しかし、一昨年の「諸外国における『インターカルチュラル』へのアプローチ」に続き、今年度「『私の国際文化学』ー多様な学問分野との関連性から」のフォーラム企画にみられるように、国際文化学へのそれぞれのイメージについて、先験的、固定的な定義ではなく、様々な角度からの縁取りの模索が組織的に始まっております。それぞれが持つにいたったイメージをすり合わせつつ、学会全体の足跡を振り返ることも、2021年の設立20周年に向けて踏むべき階梯の一つではないでしょうか。その意味でも文化の際会、混淆、共生を長崎の地で問う今年度のシンポジウムは時宜を得た企画であると思います。

他方、この「限りない自由な世界」を支える実務、運営面では、「可能な限りの制度化、標準化」、さらにはマニュアル化、効率化、省力化が求められてきております。

小さな工夫は始めました。倉真一、菅野敦志両新副会長の提案により、年3回発行のニューズレターは、本号は紙媒体でお届けし、あとの2回は電子版で学会HPに掲載することとなりました。事務局の負担軽減は、長期的、安定的な運営のための不可避の課題です。「楽しい学会」の輪をさらに広げ、同時に、「楽に続く」基盤を固めつつ「次」につなげること。これが、私の役割であると考えております。

皆様のお力を借り、お知恵を結集して、2021年の学会設立20周年に「つなぐ」努力を重ねていきます。どうぞよろしくお願いいたします。

「East meets West in Nagasaki —文化の際会、混淆、共生をめぐって」へのいざない

大会実行委員長　葉柳 和則

会員のみなさま、こんにちは。この度、2019年日本国際文化学会第18回全国大会を長崎大学文教キャンパスにて開催させていただくことになりました。実行委員会のメンバーは、2014年設置の多文化社会学部、または2018年設置の多文化社会学研究科に属しております。多文化社会学部・研究科は、社会科学から人文学までの連携を通して、グローバル化する世界を「多文化」という視点から解明し、それを教育へと、さらには社会へと還元していくことを目指して設置されました。既存のディシプリンを学ぶというよりも、教員・学生が一体となって「多文化社会学」という新しいトランスナショナルな性格を持った学問を作り上げていこうとしているところに、国際文化学とは強い親和性を見出すことができます。

私自身は、2015年2月に学会の申込をさせていただきました。共通論題、自由論題、そして公開シンポジウムでの議論を拝聴し、さらには自ら報告を行い、学会誌『インターカルチュラル』に投稿するといった経験を通して、この学会が人文社会系の多様な分野間の出会いの中で国際文化学を発展させようとしていることを実感しております。このような開かれた研鑽の場に身を置くことで、私の多文化社会学部の教員としての視野は大きく広がりました。

学部・研究科として歴史が浅いのみならず、委員会のメンバーもみな会員歴が浅く、大会運営にはなにかと行き届かないところもあるかと思いますが、みなさまのご協力のもと、長崎までご足労いただくだけの価値のある全国大会にしていく所存です。

長崎は初期グローバリズムとも言いうる大航海時代の海上ネットワークの拡大の中で、16世紀に世界とのインターフェイスとして位置づけられることで歴史叙述の中に姿を現しました。ポルトガル、スペイン、イギリス、オランダとの貿易、キリスト教の布教と弾圧、鎖国体制における対外貿易港としての繁栄、潜伏キリシタンの存在、幕末・維新期の人間と情報の結節点としての機能、造船と石炭産業による近代化への貢献、そして原爆被災。このように、長崎の歴史は、中華文化圏の周縁に位置していた日本が西欧の文化と出会うことで生じたいくつもの出来事の重層として捉えることができます。

第18回全国大会のテーマを「East meets West in Nagasaki」とさせていただいたのは、このような歴史を持つ長崎の地に身を置いて、国際文化論にとっておそらく永遠のテーマである文化の際会、そして混淆と共生について報告し、討論したいと考えたからです。いただいた共通論題・自由論題のテーマは直接的に東西の出会いから、「他者」あるいは「異他的なもの」との邂逅まで多岐にわたります。報告と討論を通して、これまでの比較文化論や文化触変論をその高みにおいて乗り越えていく視点、さらには、「文化」概念を再構築してくような議論が現出することを期待しております。

公開シンポジウムの基調講演では、香港大学の王向華先生に「From Culture as a Code to Culture as Practice」という論題でお話しいただきます。すなわち、まさに「文化」という私たちにとっての最大の鍵概念の現代的変容について議論が展開されます。基調講演の内容を受けて、公開討論を開催いたします。

第18回大会のテーマ設定はもちろんのこと、エクスカージョンにおいても、東西の文化の出会いを追体験する企画を用意いたしました。「外海の潜伏キリシタン遺跡を訪ねて—— East meets West in Sotome」と題された小旅行では、遠藤周作の『沈黙』の舞台でもある長崎市外海地区における潜伏キリシタンの信仰の痕跡、および明治期カトリック再布教関連の遺産を訪ねます。日本の西崖に位置する貧しい漁村にカトリックの宣教師が足を踏み入れたとき、人と人が、文化と文化がどのように出会ったのかを追体験する旅にしたいと思っています。

第19回全国大会を、2020年の学会20周年に向けたステップとして、学会のさらなる発展に資するものにしていきたいと実行委員全員で努力していく所存です。みなさま、どうかご協力よろしくお願い申し上げます。

第18回　全国大会のご案内

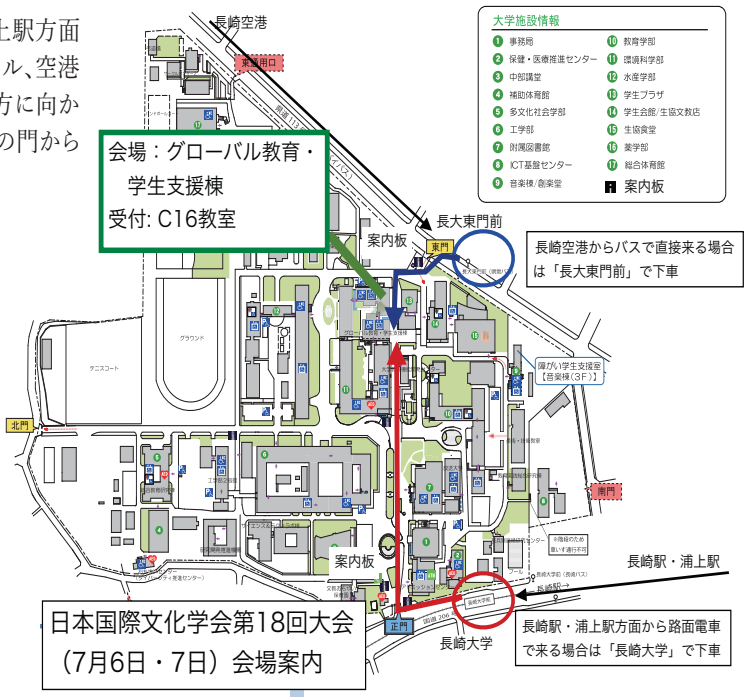
●開催日時：2019年7月6日（土）～7日（日）
●大会会場：長崎大学文教キャンパス（グローバル教育・学生支援棟）
〒852-8521　長崎市文教町1-14　長崎大学多文化社会学部
e-mail：intercultural_2019@ml.nagasaki-u.ac.jp　TEL：095-819-2932

●大会会場への交通アクセス

最寄り駅：長崎大学（路面電車）　長大東門前（バス）

〔JR長崎駅から〕　路面電車　「長崎駅前」→（赤迫行き）→「長崎大学」下車　※乗車時間：18分
〔JR浦上駅から〕　路面電車　「浦上駅前」→（赤迫行き）→「長崎大学」下車　※乗車時間：9分
〔長崎空港から〕　県営バス「長崎空港４番乗り場」→（昭和町・浦上経由長崎方面行き）
→「長大東門前（旧：長大裏門前）」　※乗車時間：45分

※会場は「グローバル教育・学生支援棟」を使用します。長崎駅・浦上駅方面から路面電車を利用される場合には、正門からまっすぐに250メートル、空港から大学にバスで直接いらっしゃる場合には、長大東門から右前方に向かって40メートル歩いた場所に教養教育棟があります。当日は両方の門からの案内を掲示いたします。



●大会参加申込

※事前申込：なるべく専用フォームへのweb上での入力にてお願いいたします。またはEメールに添付して大会実行委員会（上記参照）までお送りください。後者の場合は学会メーリングリストで送付するお申込フォームをご利用ください。
※郵送でのお申込みをご希望の際は申込フォームを大会実行委員会宛てにご郵送ください。
※年会費支払用の「振込用紙」は大会参加費の振込みには使用できません。
※振込後のキャンセル等は、個別に大会実行委員会にメールなどでご相談ください。

事前申込：　6月21日（金）締切

●大会参加費等の振込

※大会参加費用は、下記の全国大会用口座にお振込み願います。
（振込手数料はご負担願います）

【ゆうちょ銀行（郵便局）でのお振込】
ゆうちょ総合口座　13270-14323181
口座名義：葉柳和則（ハヤナギ　カズノリ）

【別の銀行等の金融機関からのお振込】
ゆうちょ銀行　店名：三二八（サンニハチ）
店番：328　普通預金　口座番号：1432318

●大会参加費

・一般会員	2,000円（当日2,500円）
・一般非会員	3,000円（当日3,500円）
・院生/学生	1, 000円（当日1,500円）

●情報交換会（7月6日）

・一般	6,000円
・院生/学生	3,000円

●お弁当代（お茶付き）

・7月6日（土）	1,000円
・7月7日（日）	1,000円

●エクスカーション（7月5日）参加費

・一般/院生/学生	2,000円

※7月6日（土）は生協食堂が営業しています（11:30～13:30）。
※7月7日（日）は生協食堂は営業しておりません。
※大学周辺には飲食店が少ないため、お弁当のご予約をお勧めします。

第18回　全国大会　日程 7月6日（土）

09:00〜　受付　《教養教育講義棟１階》	
10:00〜12:00　自由論題 A、B、C、D	
【自由論題 A】 記憶と和解 司会：首藤明和 （長崎大学 多文化社会学部教授） 《B15 教室》	世界遺産における聖地の解釈：長崎県平戸市春日集落の事例 Tinka DELAKORDA KAWASHIMA（広島大学大学院教育学研究科講師）
	ヒバクシャになれなかった被爆者—アメリカに住む原爆被爆者たちの運動史 根本雅也（日本学術振興会特別研究員（PD）/ 立命館大学衣笠総合研究所プロジェクト研究員）
	沖縄の被爆者調査を通じて見える文化の問題—核時代における新しい文化創造への一考察 桐谷多恵子（長崎大学核兵器廃絶研究センター客員研究員）
	和解による謝罪と赦し—「花岡事件」についての考察 土屋明広（金沢大学人間社会研究域学校教育系准教授）
【自由論題 B】 宗教と社会の多様性 司会：小川忠 （跡見学園女子大学 文学部人文学科教授） 《C25 教室》	用語「イスラーム寺院」の適正性の再検討 ビラール・イリヤス（長野大学環境ツーリズム学部教授）
	「西洋」の衝撃と宗教実践—明治期における「仏教因果説」論争に注目して 亀山光明（東北大学大学院国際文化研究科）
	ムスリムの異教徒との結婚を擁護するシンガポールのムスリムの主張について 市岡卓（法政大学大学院国際文化研究科博士後期課程修了）
	タイ北部におけるキリスト教伝播の一要因 森島豊（青山学院大学総合文化政策学部准教授）
【自由論題 C】 歴史と伝統の再検討 司会：菅野敦志 （名桜大学国際学群 上級准教授） 《C26 教室》	眷村が挑む歴史と文化の発信—台湾現代史の文脈から 藤田賀久（多摩大学グローバルスタディーズ学部非常勤講師）
	手漉和紙技術の「伝統」の再編成における製紙関係機関の役割に関する一考察—小川地方の「細川紙」を事例に　任暁艶（宇都宮大学国際学研究科博士後期課程）
	台湾原住民選手と〈東京オリンピック〉 菅野敦志（名桜大学国際学群上級准教授）
	許筠の『洪吉童伝』と西鶴の『好色一代男』、それぞれのユートピア 梅山秀幸（桃山学院大学国際教養学部）
【自由論題 D】 統合と差異の ポリティクス 司会：渡辺愛子 （早稲田大学 文学学術院教授） 《C34 教室》	「記念碑の細分化」がもたらす文化交流の質的変容について—ベルリンにおける事例分析を中心に　斉藤理（山口県立大学国際文化学部教授）
	フィンランドのナショナル・ロマンティシズムにおける風景画 —立ち枯れの木が語るナショナル・アイデンティティー— 田中佑実（北海道大学大学院文学院文化人類学研究室博士後期課程 2 年）
	文化、統合、承認：EU の二級市民としてのロマ 土谷岳史（高崎経済大学准教授）
12:00〜　昼食・大学院生交流会　《C16 教室　/　G3A 教室》	
12:10〜13:00　常任理事会・理事会　《C45 教室》	
13:10〜15:10　共通論題　①、②、③	
【共通論題①】研究者トライアンジュレーションで見えてくるもの—カザフスタンの英語教育推進事業を事例として 司会：岩野雅子　（山口県立大学国際文化学部教授）《B34 教室》	
Assel BAZILGALAMOVA (Regional Manager, Central Asia in Kazakhstan, Loughborough University, UK. art-time lecturer of English, Almaty／Saltanat D. AKHMETOVA（Assistant Professor of Sociology, Nazarbayev University)／大場智美（多摩大学グローバルスタディーズ学部専任講師	

【共通論題②】「暴力」と表象―政治と文化における接合点の模索 司会：深松亮太　（神奈川工業大学非常勤講師）　《C25 教室》
田島樹里奈（法政大学兼任講師）／月野楓子（関西外国語大学助教）
【共通論題③】グローバル化におけるアジア社会と宗教文化の変容 司会：伍嘉誠　（長崎大学多文化社会学部助教）　《C26 教室》
「国際比較研究における宗教意識の収斂と拡散―グローバル化における宗教意識変容と現在」清水香基（北海道大学文学研究科博士後期課程）／「香港におけるナショナリズムの台頭と宗教の役割―キリスト教会を中心に」伍嘉誠（長崎大学多文化社会学部助教）／「Religion in the age of globalization: a case study of Singapore」LIM Taiwei　（Senior Lecturer, Singapore University of Social Sciences; Adjunct Research Fellow, National University of Singapore） コメンテーター：　滝澤克彦（長崎大学多文化社会学部准教授）

15：40～18：00　公開シンポジウム　East meets West in Nagasaki――文化の際会、混淆、共生をめぐって《スカイホール》		
15:40～17:00	【基調講演】「From Culture as a Code to Culture as Practice」 王向華氏 （香港大学現代言語・現代文化学部 グローバルクリエーティブ産業プログラム教授）	司会：葉柳和則 （長崎大学 多文化社会学部教授）
17:00～18:00	パネルディスカッション 討論者:　1. 白石さや（東京大学名誉教授）2. 鈴木章能（長崎大学教授） 3. 細田尚美（長崎大学准教授）	
19:00～　情報交換会　《ルークプラザホテル》 ※稲佐山ルークホテルプラザまでは、長崎大学文教キャンパスから送迎バスで移動します。 ※稲佐山は、2012 年に世界新三大夜景に指定された長崎市のランドマーク的存在です。		

第18回　全国大会　日程　7月7日（日）

08:00～　受付　《教養教育講義棟１階》	
09:00～11:00　自由論題　E、F、G、H	
【自由論題 E】 国際変動の 過去・現在・未来 司会：牧田東一 （桜美林大学教授） 《B15 教室》	日系アメリカ人リドレス運動における調査委員会設置をめぐる一考察 ―日系組織 NCJAR の語りと戦略を中心に― 阿部純（東北大学大学院国際文化研究科博士後期課程）
	中国のアフリカ外交　吉川純恵（専修大学法学部専任講師）
	シンガポールのネイション・ブランディングにおける 2018 年米朝首脳会談 坂口可奈（北海商科大学商学部講師）
	汎太平洋協会と日本国際連盟協会―戦間期多国間国際交流をめぐる一考察 飯森明子（早稲田大学アジア太平洋研究センター特別センター員）
【自由論題 F】 表象の中の 社会と歴史 司会：葉柳和則 《C25 教室》	「日本遂に独逸に及ばず」　戦時下日本におけるドイツ映画の位置 中川拓哉（名古屋大学大学院人文学研究科ドイツ語専門博士候補研究員）
	カズオ・イシグロの作品における回想―川端康成、プルーストと比較して 林宜佳（東北大学大学院国際文化研究科博士課程後期）
	アジア・太平洋戦争後初期の日本の劇映画に描かれた戦時の危害―脱安全保障化後の危害の扱われ方の評価　髙住直樹（早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程）
	震災映像における外国人移住者の表象 鄺知硯（東北大学国際文化研究科国際日本研究講座博士課程後期課程）

【自由論題 G】 異文化交流の実践 司会：上原良子 （フェリス女学院 国際文化学部教授） 《C26 教室》	「在日歴史博物館」の夢―在日朝鮮人知識人の歴史実践とトランスナショナル交流空間の形成 山口祐香（九州大学大学院地球社会統合科学府博士課程、日本学術振興会特別研究員ＤＣ）
	国際化と地域振興―「安心できる町」が外国人を呼ぶ理由 相原征代（岐阜大学流域圏科学研究センター特別協力研究員）
	コミュニケーション能力の育成を目指した大学における短期海外研修 ―包括的な視点から　　大場智美（多摩大学グローバルスタディーズ学部専任講師）
	Looking into Landscape, Looking into History—Google Satellite から始める現代史授業 実践の試みから考えたこと　　中野聡（一橋大学大学院社会学研究科教授）
【自由論題 H】 思想と言語から たどる日本社会 司会：岡田浩樹 （神戸大学国際文化 研究科教授） 《B34 教室》	日本人集団主義説を再考する　古家聡（武蔵野大学教授）
	「学問名＋をする」と「学問名＋する」で意味が大きく異なるのはなぜか 増渕佑亮（東北大学国際文化研究科博士後期課程）
	日本語話者の主観性の変化と人口移動および国際化の関係 大槻くるみ（東北大学大学院国際文化研究科 GSICS フェロー）
	東井義雄と雑誌『思想の科学』　　長妻三佐雄（大阪商業大学教授）

11:00～13:00　　昼食　《C16 教室　/　G3A 教室》

11:10～12:20　総会　平野健一郎賞表彰式　《スカイホール》

12:20～12:50　ICCO 発表会　《スカイホール》

13:00～14:30　フォーラム　《スカイホール》

14:45～16:15　共通論題④、⑤、自由論題 I

【共通論題④】国際文化学としてのフランス文化教育
司会：高橋梓（近畿大学講師）　《B35 教室》

「近畿大学講義『国際化と異文化理解』に見る学習者の文化蝕変」　高橋梓（近畿大学講師）／「文化触変の実践と『当事者意識』」　松井真之介（神戸大学研究員）／「フランス文化ケースメソッドを用いた間文化的リベラルアーツ教育」山川清太郎（京都学園大学非常勤講師）

【共通論題⑤】スポーツと政治―1934 年の第 10 回極東選手権競技大会から 1940 年の東京五輪へと至る過程を中心に
司会：鈴村裕輔（名城大学外国語学部准教授）《C36 教室》

「日本における第 10 回極東選手権競技大会ボイコット運動の展開」冨田幸祐（日本体育大学オリンピックスポーツ文化研究所助教）／「五輪と侵攻―「イタリーの裏切り」と 1936 年の五輪開催地決定問題」鈴村裕輔／「幻の東京オリンピックとその時代―戦時期のスポーツ・都市・身体」中村哲也（高知大学地域協働学部准教授）

【自由論題 I】 越境する人、文化、 アイデンティティ 司会：杉村美紀 （上智大学総合人間科学部教授） 《C26 教室》	ニューカマー中国系第 2 世代のアイデンティティ形成―ルート（routes）に着目して 賽漢卓娜（長崎大学多文化社会学部准教授）
	ローカル化の中の中国系移民のアイデンティティの多様性 王維（長崎大学多文化社会学部教授）

事務局からのお願い

・2019年度の年会費の納入をお願いします。
・年会費未納分は速やかにお振込みをお願い致します。
・過去の会費未納分は、相当額の学会誌購入で充当できます。
・会費納入に困難を覚える方に対する減免制度もあります。
※詳細は事務局までお問い合わせください。

ゆうちょ銀行
００２１０－２－１３８４０８
日本国際文化学会

「核時代における人間の新しい文化について」

桐谷 多恵子
（長崎大学核兵器廃絶研究センター 客員研究員）

私は2005年に日本国際文化学会（以下、国際文化学会と略）に入会しました。それから14年の歳月が流れようとしています。その間、研究者としての歩みを進める中で、国際文化学会の会員であることを誇りに思うようになりました。

本学会に入会した時分より私が思考してきたことは、＜核時代における人間の新しい文化とはいかにあるべきか＞という問いでした。いまも核弾頭はおよそ1万5000発存在しています。私たちは否応なく「核時代」に生きている一人といえるでしょう。

第二次世界大戦末期の1945年8月に実戦上で核兵器が使われました。あの時、広島と長崎はまさに核戦争の場でありました。その核戦争から辛うじて生き残った人びとの証言を聞き取る作業に院生の時代から15年あまり取り組んできました。大学院時代からの研究テーマは広島と長崎の復興についてです。「復興」という言葉を耳にすると都市計画やインフラに関心が集中しますが、私が興味を抱くのはルネッサンスという意味での復興です。つまり、戦争という暴力の時代を経ての人間性の復興です。この復興に関する視点は、被爆者の人びととの対話の中で生まれました。

生存者の人たちは常に「人間とはどうあるべきか」を自分自身に問うています。例えば、敬愛する被爆者の切明千枝子さんは、聞き取り調査の中で自分史を赤裸々に語ってくださいます。彼女の証言は、戦中の暴力から始まりました。軍国主義であった大日本帝国の中で、少女であった彼女の日常には暴力がはびこっていたこと、「軍国少女」であったこと、結果的に暴力に加担していたこと、これらについて彼女は自らを責め続けています。

そして究極の暴力ともいえる核兵器による攻撃を受け、大事な人たちを失ったこと、身体と心に癒えない傷を負ったこと、戦争が「終わった」とされた時代においても暴力は生き残り、核兵器という形で世界中に広がり君臨していること。この世界の状況の中で、核兵器をなくすこと、戦争に反対すること…これら暴力を否定することが生き残った自分たちの役割であること。私は彼女が個人では背負いきれないものを背負って歩んできた道のりを聞きながら、切明さんたち被爆生存者が＜暴力に抗う＞という意味での人間のルネッサンスに取り組んでいることを知りました。更に驚くことに、核被害という絶望的な体験を経てなお、人間のあるべき姿、つまり未来を語っているのです。

敬愛する被爆者の切明千枝子さんと筆者

切明さんは最近の国内の状況は戦前に似ていると指摘されます。そして「被爆体験の継承」を唱える声が強くなる一方、個別の体験をあたかも全体の体験であるかのように括り、語られる状況を危惧しています。それは個を全体の中に閉じ込める傾向の一つの表れだ、というのです。被爆者一人一人が個別の、その人にしかない人生の中で原爆に遭っているのだ、と切明さんは繰り返し話されます。何よりも個が消えていく事が一番恐ろしいことであり、「そうなるとまたあの戦争の時代に戻っていくことになる」と心配されているのです。

被爆者の証言には「二度と誰にも同じ思いをさせたくない」という他者や将来の世代への視点があり、すべての人類と共生していく社会をつくるという意志が存在しています。私もその意志に賛同し、研究を通して連帯していく所存です。私の抱える＜核時代における人間の新しい文化の創造＞というテーマを議論できるのはまさに国際文化学会であります。人間が共に生きていく道を議論するには細分化された学問分野では限りがあり、学際的に取り組まねばなりません。この点に思い至るとき、国際文化学会をつくってくださった先達の研究者の方々に敬意を表するとともに、この学会の会員であることを誇りに思います。今後も国際文化学会においてのびのびと自分の学問的テーマを議論し、微力ながら学会発展のために尽力していくことを誓い、結びとさせていただきます。

●宿泊先

※長崎市内のホテルは、長崎駅周辺および旧市街に集中しております。各自で予約をお願いいたします。
学会会場である長崎大学文教キャンパス周辺、および浦上駅周辺にはホテルはわずかしかございません。

【長崎駅周辺】（文教キャンパスまで路面電車で約20分）

ホテルクオーレ長崎駅前	http://www.hotel-cuore.com	（TEL: 095-818-9000）
ホテルウイングポート長崎	http://www.wingport.com	（TEL: 095-833-2800）

【出島周辺】（文教キャンパスまで路面電車で約25分）

ホテルベルビュー長崎出島	http://www.hotel-belleview.com	（TEL: 095-826-5030）
エスペリアホテル長崎	https://www.s-peria.com/nagasaki/	（TEL: 095-826-1211）

【長崎市旧市街】（文教キャンパスまで路面電車で約30分）

リッチモンドホテル長崎思案橋	https://richmondhotel.jp/nagasaki/	（TEL: 095-832-2525）
出島の湯ドーミーイン長崎	https://www.hotespa.net/hotels/nagasaki/	（TEL: 095-820-5489）
ホテルフォルツァ長崎	https://www.hotelforza.jp/nagasaki/	（TEL: 095-816-2111）

※予約困難等でお困りの場合は、大会実行委員会までご相談ください。できる限りサポートをいたします。

エクスカージョンのご案内

●テーマ：外海の潜伏キリシタン遺跡を訪ねて– East meets West in Sotome

今回のエクスカージョンでは、遠藤周作の『沈黙』の舞台でもある長崎市外海地区における潜伏キリシタンの信仰の痕跡、および明治期カトリック再布教関連の遺産を訪ねます。

外海の海岸に立つと水平線付近に五島列島が望見されます。不可視の彼方には中国大陸が横たわっています。このような位置ゆえにこそ、『沈黙』の宣教師たちの船が外海にたどり着いたのであり、キリシタンたちが潜伏することもまた可能となりました。

2018年に世界文化遺産に登録された「出津集落」と「大野集落」を中心に、潜伏キリシタン墓地、枯松神社（神社を偽装したキリシタンの聖地）、大野教会、ド・ロ神父記念館、出津救助院、大平作業場跡、バスチャン屋敷跡（伝道師の隠れ家）など、日本の西崖に位置する貧しい漁村にカトリックの宣教師が足を踏み入れたとき、いかなる出会いが生まれたのかを追体験する旅にしたいと思っています。

●開催日時：

2019年7月5日（金）13：50～18：45

※羽田10:00発のJALに乗れば、長崎空港経由、リムジンバス利用で13:03に長崎駅到着。

●集合場所：長崎駅改札前（予定）

※13:50集合（時間厳守）

●参加費：2,000円

※大会参加費と一緒にお振込みください。

●募集人数：20名（先着順）

※詳細は参加者にお知らせします。

時間	プログラム（※変更の可能性あり）
13:50	参加者集合（長崎駅改札前）
14:45～15:00	潜伏キリシタン墓地見学
15:15～15:35	枯松神社見学
15:50～16:30	ド・ロ神父記念館、出津救助院見学
16:40～17:00	休憩（道の駅夕陽が丘そとめ）
17: 15～17:30	大野教会
17:45～18:00	大平作業場跡
	※時間に余裕が出れば、バスチャン屋敷跡
19:00	長崎駅にて解散

参加申込先

第18回全国大会　大会実行委員会
Email: intercultural_2019@ml.nagasaki-u.ac.jp
〒852-8521 長崎県長崎市文教町1-14 長崎大学多文化社会学部　Tel: 095-819-2932